

# 舞 たいん

Vol. **151**  
2023.3



**学生が地域を変える**  
～地域の活力づくりの新しい形～



## ■はじめに

最近、地域の魅力を情報発信する活動や地域産品を活用した新たな商品開発に取り組む県内の高校生、中学生や地元大学の学生の姿を、新聞やテレビでよく目にします。

例えば、生徒たちが地域貢献活動に関わることは、学校の授業で身につけた力を実社会で発揮する喜びを覚える機会となる、校内で完結する学習活動と比べ、「現場でどのように活かすべきか」をイメージすることで実務能力の向上につながるなど、課題解決学習の面で大きなメリットがあるとされています。

また、人口減少社会が進み社会構造や雇用環境が急変する中で、若者は極めて貴重な人材であり、将来の地域の担い手としても期待されることから、こういった活動において、地域住民との触れ合いにより地域と関わることの楽しさを見つけながら、地域における新たな価値を生み出してくれることは、地域づくりの面でも大いに戦力となるものと考えます。

今回は、生徒学生たち若者が地域の現場に入り、大人と対等な立場で地域課題の解決に向き合い、自発的に地域を変えようとする取り組み事例などを紹介します。地域の活力づくりの新しい形として参考となれば幸いです。

(アドバイザー 本田 侑香)

## ■表紙のことは

今回は、町内の廃校を活用してキッチンカーでイベントを開催する小田分校の生徒の様子を取りあげました。地域おこし協力隊の方の力を借りながら、生徒たちが一から企画したそうです。皆さんの大人顔負けの接客の様子は本当にキラキラと輝いていますね。若者の「やりたいからやる！」と言える興味へ一直線の探求心と行動力、そしてひたむきな姿に、「俺たちも負けてられんな」と気持ちを新たにしている住民の方も多いのではないでしょうか。

この子たちが一回りも二回りも成長し、社会人になり結婚し、子育てをするようになっても同じように故郷に思いを馳せてくれれば…これほど嬉しいことはないと思います。

柳原あや子

## ●アングル

次世代を迎え、一緒に未来を創りだす地域に…………… 1  
浦崎 太郎／大正大学地域創生学部教授

## ●特集／学生が地域を変える ～地域の活力づくりの新しい形～

- ①大人にできるのは、環境を整え、仕組みを変えること…………… 4  
西田 遙／NPO法人河原部社 理事長
- ②松野町には高校はないけど高校生はいる！  
「私たち立ち#マツノイズム高校」の取り組み始動…………… 6  
井上 靖／松野町ふるさと創生課長
- ③双海地域におけるジュニアリーダーの役割…………… 8  
二宮 莉穂／双海町ジュニアリーダー会 代表
- ④愛媛県教育委員会新規事業  
「ソーシャルチャレンジ for high school事業」について…………… 10  
川本 昌宏／愛媛県教育委員会 高校教育課長
- ⑤地域に根差した団体へ…………… 12  
西村 和真／松山大学地域創造研究所Muse 代表

## ●地域おこし協力隊 リレーレポート

"おだこう"がある未来を守る…………… 14  
小田原 希実／内子町地域おこし協力隊／  
愛媛県立内子高等学校小田分校教育魅力化コーディネーター

## ●えひめ暮らしネットワーク通信

えひめ暮らしネットワークの活動について…………… 16  
千々木 涼子／一般社団法人えひめ暮らしネットワーク 事務局長

## ●特選ブログ/shin1さんの日記

子どもや学生も地域を変える新しい戦力である…………… 18  
若松 進一／人間牧場主・年輪塾塾長

## ●"MY TOWN" うおっちゃんぐ

浦中要次郎とその家の物語り(八幡浜市)…………… 20  
岡崎 直司／タウンツーリズム講座主宰・近代化遺産活用アドバイザー

## ●センター事例紹介

全国初!?地方公共団体のための  
ワーケーションプログラム実施に向けて…………… 22  
塚本 悠太／井上 美奈／村上 和也／能登川 亜美  
一般財団法人地域活性化センター 企画・人材育成グループ 副参事

## ●えひめ地域づくりアワード・ユース2022

最優秀賞、優秀賞の紹介…………… 24  
愛媛県立大洲農業高等学校「果樹班」  
愛媛県立西条高等学校「輝安KOU房」  
愛媛県立伊予農業高等学校「生活科学科食物班」

## ●市町振興協会事業案内

令和5年度事業のあらまし…………… 28  
公益財団法人 愛媛県市町振興協会

## ●Information センターからのお知らせ

「えひめイベントBOX」ウェブサイト作成のお知らせ  
パブリックスペース「tilikiの部屋」のご紹介

# 次世代を迎え、一緒に未来を創りだす地域に

大正大学地域創生学部教授 浦崎 太郎



## いま次世代に必要な学びとは何か？

近年、中高大生の地域参加に注目が集まっている。とはいえ、若者を地域と関わらせれば無条件に地域の未来が開ける訳ではない。では、どんな心得や配慮が必要なのだろうか。

始めに結論を述べると、地域を創り支える次世代を育成しようと思えば、学習指導要領に忠実な教育活動を展開することだ。学習指導要領とは、小中学校や高校で教育課程を編成する際の基準について文部科学省が定めたもので、社会の変化などをふまえて、ほぼ十年ごとに改訂される。そして高校では、令和4年度の入学生から新しい学習指導要領が適用されており、その特徴は、次に掲げる3要素の重なりとして図式化できる。

1つ目は「自分」。自分らしさや興味関心が大切にされれば、自分の内側からエネルギーが湧き上がり、夢中になることができるし、進路の種にもなる。2つ目は「社会」。地域などに内在する課題を発見・解決したり、新たな価値を創造したりできれば、社会にうまく参加し

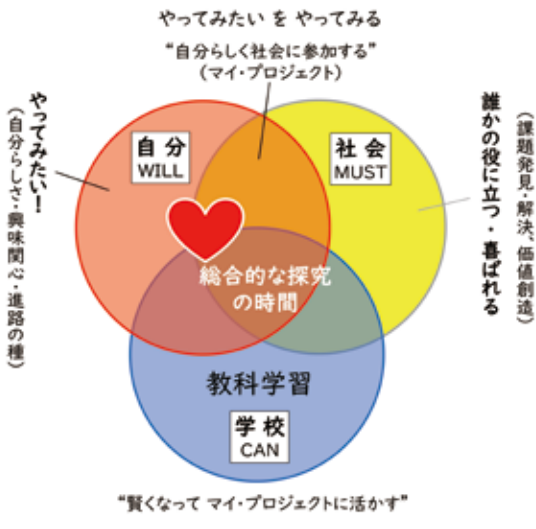
ていくことができる。そして、3つ目は「教科」。教科学習を通して専門的な知識・技能・見方・考え方を身につければ、自己実現や社会貢献の可能性も広がる。以上より、これら3つを重ねるとは「自分らしく、高い専門性を発揮して、社会に参加する」力を育む教育と言える。

重要なのは、こうした教育活動を学校のみで完結するのは無理であり、学びの場を地域へと広げることが求められる点だ。具体的には、各生徒の心に「やってみよう！」と火がつく機会や、実際に動く場が必要なのだ。こうした土台があれば、生徒は実際に地域で動いてみて、すぐさま自分の無力さを痛感し、「賢くなりたくない」という気持ちが芽生える。その後「どうすれば課題を解決できるか？」という意識で学校の授業に臨むようになると、種々の発見があり、専門的な知識・技能・

見方・考え方が身につく。そして、それらを組み合わせると「やってみよう」が成就する。しかし、こうした教育活動を実施するしない以前に、現状、こうした趣旨や内容に戸惑いを覚える大人が圧倒的多数だ。ではここで、一連の変遷を読み解くために必要な視点は、1980年代、家

### 高等学校学習指導要領に描かれている学習像

(平成30年改訂/令和4年度入学生より実施)



業や自営業などに就こうという独立指向が弱まり、雇用労働指向が強まったことだ。

### 雇用労働指向が学校教育に及ぼした影響

まず、農業・商業・工業・家政・福祉などの専門科について解説する。戦後しばらく、高校には「家業等のために必要な専門知識を身につける」役割が求められていた。「社会」と「教科」が重なった状態だ。しかし、雇用労働指向が強まると、高校はそれに応え、生徒を少しでも待遇のよい会社就職させようと勤しむようになる。そして「それには資格や検定が有利」となれば、そこに傾倒する。その末に「自分」や「社会」と分断された「検定至上主義」的な指導が幅を利かせるようになったと考えると、現状に合点がいく。

続いて、普通科だ。戦後しばらく、旧制中学校の系譜をもつ高校を中心として、普通科には、裕福で知的好奇心が強い若者が通う傾向も見受けられた。また、先生も地域の文化人で、学究的な授業が展開されていた。

それが、1980年代に変質する。待遇のよい就職には学歴が重要で、それには偏差値が必要となって「興味関心や地域との関わりなどよりも偏差値が大事」だという考えが台頭し、勉強が偏差値向上の手段になったのだ。

### 地域課題の解決に関わらせる効果と限界

当然、その副作用は表れる。「教科」が地元と切り離されれば、生徒は地元に関心になるし、もともと好待遇を期待しているのだから、何の躊躇もなく地元を去っていく。つまり、地方の進学校は人口流出装置として、地元の衰退に大きく加担してきたわけだ。ここで、辺境の地ほど、若年層が高校進学時に地元から流出すること起因する危機が早く顕在化し、地域の担い手を育てるべき必要性が自覚された。こうした事情を背景に「社会」の部分強調したが、島根県立隠岐島前高等学校で始まった「高校魅力化」だ。

同校の挑戦は、地域をフィールドとする体験的な課題解決学習を「総合的な学習の時間」の授業に導入する価値を世に知らしめ、「社会に開かれた教育課程」を謳う学習指導要領の成立にも寄与するなど、画期的な点も多かった。では、高校魅力化を導入すれば、無条件に若年層の流出防止や地域の担い手育成を実現できるかといえば、決してそうではない。それは、多くの現場に導入された昔日の高校魅力化は「地域に関わって課題を解決するのは総合的な学習の時間だけでなく、受験教科は従来通り偏差値指向でよい」という固定観念を脱却できていないからだ。

### 偏差値盲信がもたらす悲劇

実は、分断状態の弊害は高校卒業後に表れる。高校時代に地域で課題解決に勤しんで「推薦・総合型選抜」等で進学した学生には、地元には関心があり、アクションには熱心な反面、学業には関心が薄い傾向も見受けられる。他方、教科学習を頑張って「一般選抜」で進学した学生には、学業が受け身であるほか、地元に対する関心も、学んだことを社会で活用する感覚も希薄な傾向も見受けられる。つまり、どちらの若者も、将来「自分らしく、高い専門性を発揮して、地元」に新たな価値を創造することは難しいのだ。こうした傾向は、新しい学習指導要領が導入され、地域課題を発見・解決する活動がマイプロジェクトに置き換わっても続いている。しかも、少し頑張っている高校においてすら、この段階。旧来的な進学校の大半は、そこに遠く及ばないのだ。

こうした事情を紹介しても、「有名な大学に合格するには」と（愛媛県でいえば）松山市の旧来的な進学校を信奉する考えは変わらない。しかし、大学の入学者選抜方針を熟読し、総合型選抜等の出題傾向を丁寧に分析すると、今や、学習指導要領を誠実に具現化する高校の方向が圧倒的に有利である構図に気づく。しかも、その傾向は大学入学共通テストでも同様なのだ。「こんな細かい知識まで



教える時間はない」と考えて宿題を与えまくる学校では、点数が伸び悩むばかりか、病んでしまう生徒が続出している。対照的に、知的好奇心に基づいて「なぜだろう?」と探究的に学べる授業を展開する学校では、点数を確保し、しかも生徒はキラキラしている。

**次世代を仲間として地域に迎える重要性**

要するに、学習指導要領に誠実だと「生徒は生き生きし、志望が実現し、地域の未来も明るい」のに対し、不誠実だと「生徒は苦痛を覚え、志望は叶わず、地域の未来も暗い」という構図になっているのだ。しかも、今はまさに、両者の二極分化が進行中の局面にある。

どちらの道を選ぶのか。それは、実は地域の人々が価値観を転換できるか否かにかかっている。高校生に限らず、次世代を「一緒に未来を創りだしていく仲間」と捉え、将来「自分らしく、高い専門性を発揮して、社会に参加する」のを歓迎して迎え、挑戦や成長を応援する地域に所在する学校のみが、学習指導要領を具現化しうるのだ。

このような視点を持つことで、今号で紹介された事例がもつ価値や発展性がいつそう鮮明に映るようになることを願ってやまない。

### 学びの特徴からみた 高校教育の 歴史的変遷

#### 雇用労働指向の増進 (1980年代~)

#### 弊害を克服する挑戦

#### 教育政策への反映

平成30年改訂 高等学校学習指導要領

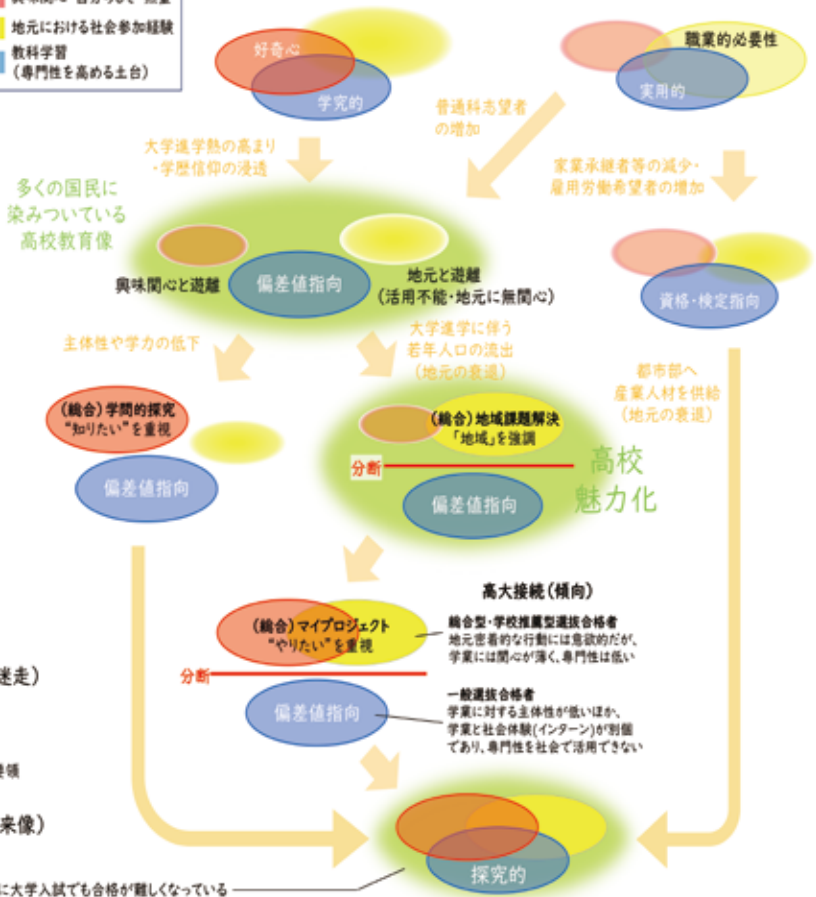
(理想的将来像)

こうした学びを保障しないと、既に大学入試でも合格が難しくなっている

- 興味関心・自分らしさ・熱量
- 地元における社会参加経験
- 教科学習 (専門性を高める土台)

#### 普通科系

#### 専門科系



# 特集1

## 大人にできるのは、環境を整え、仕組みを変えること

NPO法人河原部社理事長

西田 遙

こどもわかものまちづくりNPO

山梨県韮崎。かつて河原部村と呼ばれていた時代、東京・静岡・長野につながる3つの街道がちょうどこの地で交差し、人や情報、物資の往来の拠点として非常に賑わいをみせていたそうです。そんな人と人が、物と物とが、情報と情報とが交差する場所だったからこそ、この地には文化が芽吹いたのだらうし、教育者や実業家として世の中に貢献した先人たちが育まれたのかもかもしれません。

いろんな人や物や情報同士の接点があること、関わるためのきっかけと場があること、一方ではなく相互に多方向に関係しあうこと。もしかしたら、今も昔も、そしてこれからも、それがよりよい人を、地域を育むのではないだろうか。そんなことを考えながら、私たちは『県内初の中高生のサードプレイス』『出身者向けのローカルWEBメディア』『しきんとひとのある教育のしくみづくり』『自然と誰かと一緒に働きたくなる若者向けワークスペース』の4つの活動を展開しています。

### 中高生の第3の居場所

「中高生のことを学校と家に任せすぎていないだろうか？」「もっと地域が彼らに

できることがあるんじゃないか」という考えの元、今から8年前に市民の有志による『ユースセンターづくり構想』が立ち上がりました。そしてその構想スタートからわずか11か月後、市民の連携により、JR韮崎駅の目の前にある市民交流センターの地下1Fに広さ約250㎡の『Miacis』という中高生専用の公共施設が完成しました。

施設名は約6500万年前に生息していたイヌヤネコの祖先といわれている、進化の始まりである生き物の名前から来ており、中高生自身もまさにミアキスのようにこれから何物にも進化していくてほしいという想いが込められています。



Miacisで中高生が思い思いに過ごす風景

放課後や休日、Miacisに自由に集った中高生は、思い思いに勉強したり遊んだりしつつ、施設内の様々な掲示、スタンプとの会話、新しくできた同世代の友達、参加したイベントなどを通して、学校や家とはちよつと違う、ひと・もの・こととの接点を得ることができま

す。

### 5C+1C

PYDという青少年の発達に関する研究では、『ユースのスキル、能力、資質の形成を促し、健全な人間関係構築を助長し、取り巻く環境を整備し、社会的な仕組みを改善していく』という概念が重要とされています。そしてこのPYDの考えを元に、中高生にさまざまな機会を提供していくと、5



ユースセンター Miacis でのイベントのひとつ



つの要素①能力 (Competence) ②自信 (Confidence) ③つながり (Connectivity) ④人格 (Character) ⑤思いやり (Caring) が満たされていき、そうするとそこからもう一つのCの要素⑥貢献 (Contribution) が生れるという結果が出ています。英単語の頭文字を取ってこれを5C+1Cと呼んでいるのですが、まさにこの8年間日々中高生と関わる中で、これは私たちも実感しているところであり、強く共感している考え方です。

### 地域に活力を生んだいくつかの活動事例

女子高中生ラジオユニット『しらす丼一人前』。ネーミングからしてユニークなこの活動は、中学時代学校には行けないけれど Miacis にはよく来ていた女子高中生3人が、「将来声を使った仕事をしたい」「中高生のリアルな気持ちや考えを社会に届けたい」という想いから、地元ラジオ局に直談判して番組枠を獲得して、企画からゲスト交渉、収録、パーソナリティーまでを全て自分たちで行ったラジオ番組制作活動です。毎回自分達が一人前だと思おう大人(市長、保育園長、憧れの大人...)をゲストに迎え対談をしながら「一人前ってなんだ？」に迫っていったこの取り組みは、ラジオを通して広く地域に発信されると同時に、1年半にわたりこの活動を通して彼女達自身がどんどんと進化していく姿を見て、同世代も大人達も大いに刺激を受けました。



女子高中生によるラジオ番組の収録風景

学生団体『トップファン』。Miacis でイベントに積極的に参加したり、スタッフと日常的によく対話をしたりしていた一人の高校生が「山梨のトップファンを増やすことが地域の活性化につながる」と考え、山梨の企業や団体に企画提案を行っていった活動です。大学生を経て社会人になった今でも続けているこの活動は、40人以上の同世代メンバーを集める活動に発展し、中小企業から大企業まで本当に多くの企業と協同し毎月様々なプロジェクトを展開しています。

### 大人からではなく、中高生自身から

『中高生の新しいアイデアによるまちづくり』のような文言を目にするところがあります。その度に思うのは先に触れた5Cの要素が満たされていないと、本当の意味での自身や他者そして地域社会への貢献の要素は生まれてこないということです。つまりいきなり形だけ整えて行政などが『中高生×地域』の活動をはじめたところで、主体性はまったく生まれにくい続きもせず成果も生まれないということは押さえておきたいところです。

逆に言えば、今回紹介した2つの学生による取り組みのように、5つの要素を、彼らを取り巻く学校・家庭・地域が一丸となって満たしてさえいけば、彼らは自分たちで勝手に主体的に活動し始め、その活動は地域に活力を与え、より大きな相乗効果を生まむまでに発展し得るといえることではないでしょうか。



中高生主体の活動風景

# 特集2

## 松野町には高校はないけど高校生はいる！ 「私たち立#マツノイズム高校」の取り組み始動

いよいよ本格始動

本稿起筆の瞬間、高校生いや未来の大人たちから、つぎの案内が届きました。

『案内状抜粋』

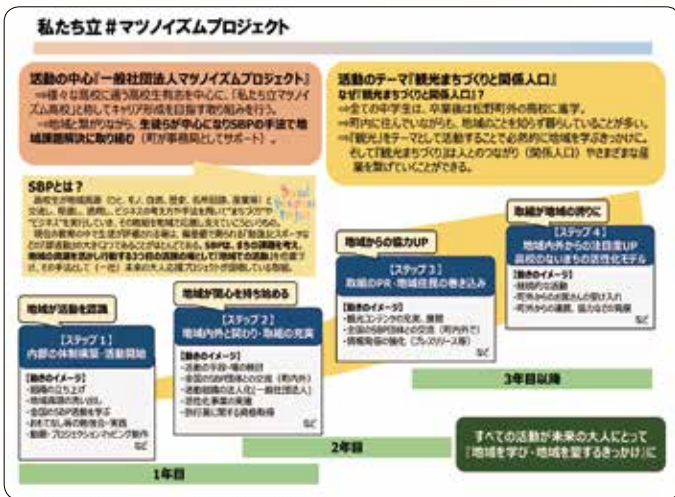
私たちは生まれてからこれまでの間、多くの地域の皆様に見守られ、ご指導をいただきながら成長することができました。そしてこれから、わがふるさと松野町や地域の皆様に対して、どのようにお返しをすればよいか日々、話し合いをしてきました。

このような中、私たちはこれまで、さまざまな場面で学んだ成果を、高校はないけど高校生はいる「松野町の高校生」として、まちの課題解決やまちづくりに取り組みすることで表現し、さらには、「自覚」と「責任」をもって取り組むため、一般社団法人として活動をするごこととしまし  
た……

「私たち立#マツノイズム高校」の取り組みがいよいよ本格始動するのだと実感するワクワクの瞬間でした。



さあ、始動！



「私たち立#マツノイズム高校」の取り組みが始まったのは、行政、地域、そして高校生たちの思いがタイムリంగాよく重なったこともありま  
す。しかもそれは偶然ではなく必然であるように  
思います。

高校はないけど高校生はいる

こんな感じで取り組もう！

まずは行政の立場からのお話です。松野町は人口3700人で愛媛県内最小と呼ばれるまちです。まち・ひと・しごとが隔々まで見渡せる規模です。松野町は、まちの自然や文化、生活が次の世代に引き継がれていき、50年後も100年後も穏やかな暮らしがこの地で持続していくことを目指しています。そのためには、まち・ひと・しごとを存続させていくマンパワーが必要であり、町内の各世代がそれぞれの役割を担っていく必要があります。そのなかで、令和3年度に開催した官民連携の政策形成コンペで、高校生のまちづくりへの関わりを高め、まちの課題解決につなげる「松野高校プロジェクト」の提案があり、実装すべき施策として採用されました。

次に高校生の立場からのお話です。松野町の子どもたちは、発達段階に応じたキャリア観を身に着ける学びを、地域の住民のご協力を受け



議論は熱を帯びる

松野町ふるさと創生課長 井上 靖





ながら重ねています。そしてこの松野中学校の生徒たちは、空き店舗を活用して「弾き語りライブ」を企画運営したり、ご協力を受けたお返しとして、生徒が地域に関わっていく「まちおこプロジェクト」を実行したり、仮想の株式会社を設立して、実際に農産物の生産販売に取り組んだりと、柔軟な発想と旺盛な行動力で松野町を盛り上げてくれました。しかし、町内に高校がないため、中学校卒業とともにその活動が途切れて、せっかくの起業家マインドを発揮できる機会が失われてしまうと危機感を感じていました。

そんな両者のタイミングが合致したのが、「松野高校プロジェクト」という発想。もちろん正式な高等学校を設立するのではなく、松野町を学習の場と見立ててまちづくりの勉強会を定期的に開催し、最終的には起業し、まちの課題解決を目指すという内容です。早速、町内の高校生を対象に調査したところ、この高校の活動に参加したいという意見が多数寄せられました。

**活動に責任と自覚を持って取り組むために**

「松野高校プロジェクト始めるよ!」のかけ声を待っていた13名の高校生が集まり、いよいよプロジェクト始動です。

立ち上がり初年度は、①地域をつなぐ、②地域の課題に気づく、③活動を持続していく、基盤を創る、④責任と自覚を持って活動する、の4点について重点的に活動することとしました。

まず、①地域をつなぐ活動では、音楽を切り口につながりを広げようという趣旨で、かつて

開催されていた森の国音楽祭を復活させることを目指し、第1回森の国の音楽祭を企画運営、多くの大人たちを巻き込み大きな成果を挙げ、モチベーションが上がったようです。次に②地域の課題に気づくでは、自分たちが将来住みつけたいまちをどうしたいかの視点でまちを見ようということになり、早速自分たちの通学手段である、J R予土線の利用促進について取り組みを始めました。③の活動を持続していく基盤を創るでは、中学生への活動の周知や大學生との連携を実施しています。すでに、この活動を知った松山在住の松野町出身大學生が、「松野町学生地域おこし協力隊」というコミュニティを立ち上げ、高校生たちと深く関わりを



お披露目イベント「森の国の音楽祭」



世代を超えて創り上げる

持つようになりました。最後に④責任と自覚を持って活動するでは、一般社団法人として法人化していくことを決定し、法人名に高校という名称が使えないことや、未成年での設立などのハードルを乗り越え、「一般社団法人マツノイズムプロジェクト」として、令和5年2月24日設立しました。

**マツノイズムプロジェクトの今後の展開**

このプロジェクトは、高校生いわゆる「未来の大人」たちが活動を経て「行動することの重要性」「社会性の向上」などを学び、その成長の結果が、地域の課題を自分事として捉え解決できる人材を輩出する仕組みとなればと思っております。

また、未来の大人たちの活動を見て、どこまで大人たちを本気にさせるのか、また、未来の大人たちが起爆剤となつて、新しいビジネスや、持続可能なまちづくりの仕組みが生まれるのか、ワクワクしながら見守っていききたいと思います。



いろいろな才能を持つ社員が在籍

# 特集3

## 双海地域におけるジュニアリーダーの役割

双海町ジュニアリーダー会代表 二宮 莉穂

### 双海町ジュニアリーダー会とは

伊予市双海地域で実施している双海町こども教室は、地域の魅力を活かした、様々なプログラムを体験することにより、ふるさとを愛する心をもった、心身ともに健全な子どもを育てることを目的とした事業です。

対象は年度当初に募集し、参加を希望した旧双海町内三つの小学校の児童たち。主な活動内容は、年間を通して班で活動を行う「ふるさと体験塾」、長期休暇等を利用した単発事業の「おもしろ大作戦」、親元を離れて1週間の集団生活を行う「わくわく生活体験夕焼け村」の3本柱です。



双海町こども教室でのボランティア活動

そして、双海町ジュニアリーダー会とは、このよう

な活動を経験し、お手伝いをしたいと思った中・高・大学生によって組織されています。双海町こども教室のお手伝いをしたり、研修活動において自分たちの経験を積んだり、ジュニアリーダー同士の交流を深めたり、地元の高齢者福祉施設の納涼祭や、地域行事のボランティアスタッフ、地域のボランティア清掃など、幅広く活動しています。

### ジュニアリーダーの活動が始まったきっかけ

当初は公民館主事が双海町こども教室を経験した一人の卒業生に「ボランティア」として関わってみたいかと提案したところ、その卒業生も「こども教室に恩返し」をしたいということになり、たった一人で始まった活動です。それが年々ボランティア活動への賛同者が増え、平成23年度に正式に「双海町ジュニアリーダー会」という組織を立ち上げ、今では中学生から大学生の33名で年間を通して活動しています。

### 双海地域を活性化させるために

このような活動をしてきた中で、双海地域のために私たちができていることはないか考えることが多くなっています。その中で、旧下灘中学校校舎を有効活用できないかと考えました。現在、旧下灘中学校は施設利用を行っています。利用者が少なくなっているため、旧下灘中学校で何か活動を行うこと



肝試し大会運営メンバー



で旧下灘中学校の存在を地域の人々に再認識してもらいたいと思ひ、校舎を用いた肝試し大会を昨年の夏に計画しました。

計画は本番の一月前から始めました。まず、校舎の中を実際に歩いてみてどの教室が使えるかを確認したり、どのような驚かせ方を進めていくうちに様々なアイデアが生まれ、より良いものになるよう協力し、当日まで試行錯誤を重ねて肝試し大会が成功するように努力しました。肝試し大会は自由参加のイベントであつたため、どの程度人数が集まるのか不安な気持ちの中、準備を進めていきましたが、いざ始まると予想していたよりも多くの人々が来てくださいました。「怖かつた」「クオリティが高くてびっくりした」「もう一度まわりたい」といったお褒めの言葉も多くいただき、努力した甲斐がありました。また、双海地域に住む方だけではなく、双海地域外に住む旧下灘中学校出身



暗闇に潜む影…



ベンチのデザインを考えている模様…



完成間近! もう一息…!



ベンチはJR下灘駅・シーサイド公園などに計5基設置。ぜひ、フォトスポットとしてご活用ください!

の方々も大勢来てくださって、旧下灘中学校の存在を思い出して欲しいという願いも叶つたと思ひます。この肝試しの活動を通して、眠っている双海地域の様々な資源を有効活用することによって双海地域を活性化できることと、ジュニアリーダーがしている活動により双海地域の魅力を知ってもらい、活性化に少しでもつながっていることを実感できる良い経験となりました。また、今回の肝試しは、様々な人の協力があつてこそ成功した活動であると実感し、関わつてくださった地域の人々となつながらことができ、感謝しています。

### 今後の展望

今後も継続して肝試しをしたり、新たな活動として動画作成を試みたりしたいと考えています。また、最近ではJR下灘駅やシーサイド公園など双海地域を訪れる観光客も増えて

きました。そのような観光客の方々や地域の方々には双海の夕日などの絶景を眺めるためや、ちよつとした休憩のために使つていただき、憩いの場になればと思ひ、双海地域の国道沿いにベンチを設置する事業も始めました。

まだまだ眠っている双海地域の魅力を引き出すために、学生ならではのアイデアで大好きな双海地域を活性化させたいと思ひます。

# 特集4

## 愛媛県教育委員会新規事業「ソーシャルチャレンジ for high school 事業」について

愛媛県教育委員会 高校教育課長 川本 昌宏



はじめに

社会構造や雇用環境が急速に変化し、予測困難な時代となる中、一人一人が持続可能な社会の担い手として、新たな価値を生み出していくことが期待されています。そのような中、令和4年度入学生から実施されている新学習指導要領においては、学校と社会が連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を生徒に育むことが求められています。

そこで、愛媛県教育委員会では、地域の課題について地域社会と連携しながら解決を図る体験的な活動を通して、いつまでも安心・安全に住み続けられる地域づくり等の活動を深く考える姿勢を育成するとともに、持続可能な社会の実現に向け、地域社会で主体的に活動できる人材の育成を目的とし、令和5年度から全ての県立高等学校・県立中等教育学校が取り組む「ソーシャルチャレンジ for high school 事業」を実施します。

本事業は、高校生が地域観光ガイドの企画・実践を行ったり、特産品を活用した新商品を開発したりするなど、これまで一部の学校で行われていた地域社会と連携した活動を、全ての県立高校等において実践できるよう支援するものです。

これまで県立高校等が行ってきた活動を紹介します

### 今治東中等教育学校における取り組み

「地域資源の活用による地域活性化プロジェクト」桜井観光ガイド承ります！」

地域の方を講師として、桜井地域の歴史を学んだり、フィールドワークにより地場産業である桜井漆器の技術に触れたりする中で得た知識をもとに、JR四国の協力を得て、1日限定ツアーの企画立案や商品化に取り組みました。また、観光客の動向を分析し、得た結果から、今治での滞在を多くする方策を提案し、今治市主催のコンテストに応募したところ、1位を受賞し、活動の励みとなりました。市役所の方と持続可能な都市について考える活動も継続してお



桜井漆器の技術に触れる（今治東中等教育学校）

### 上浮穴高校における取り組み

「久万高原町まるごと学び舎プロジェクト」

地域の高齢者の方を対象に、集落支援員の方の協力のもと行った調査結果や、地域住民の約半数が高齢者であるという地域の実態をもとに、高齢者の視点からまちづくりに取り組むことを考えた。住民の多くが祭りに関わり継承していることに加え、住民が抱く将来への

り、地域から頼りにされる存在を目指し、地域活性化に取り組んでいます。



地域の集落支援員の方の協力を得て、調査を実施（上浮穴高校）

不安といった思いにも触れ、生まれ育った地域で、助け合い、つながって生きていくことの幸せを実感するとともに、その幸せを創っていききたいと、地域の祭りボランティアを「まつりんくる！」と名付け、取り組みました。今後は、子育て世代の視点から、まちづくりを考えていく予定です。

**三崎高校における取り組み**  
「みさこう・せんたんプロジェクト」

全生徒が学ぶ学校設定科目「未咲輝（みさき）学」においてテーマを設定し、探究活動を行っています。地域の菓子店と協働して行った特産品開発や、海の漂着物を再利用した「ブイアートプロジェクト」、県内外の高校生を伊方町に招いて行う高校生シンポジウム「せんたんミーティング」、廃校となった中学校を舞台として行った「みさこうマルシェ」など、活動は長期に、そして多岐に渡っています。教科の



地域おこしイベントの開催（三崎高校）

枠にとらわれない活動の中で、地域資源を新たな資産と捉え、地域の方とのつながりを深めながら、生徒が主体となって取り組んでいます。

**「ソーシャルチャレンジ for high school 事業」の主な内容を紹介します**

**(1) 課題解決に向けた研究活動**

全ての生徒が地域課題とその解決策について学習するほか、生徒が考えた、地域課題解決に関するアイデアをもとに、地元大学や企業、地域等と連携・協働しながら、SDGsへの取り組みや地方創生等の現代社会の課題解決に向けた活動を実施します。

具体的には、「地域おこしイベントの企画・開催」「地域の伝統文化の伝承に関する講習会の企画・運営」「SDGs達成に向けた地元企業やNPO法人と連携した取り組み」「環境保全や自然保護に向けた大学と連携した取り組み」「特産品普及に向けた高校生からの提案・実践」などです。

**(2) 高校生による地域の魅力再発見・PR動画の作成**

各校において、高校生の目線で、愛媛で暮らすことや、働くことの意義を再発見し、地域の魅力を発信するPR動画を作成します。

地域で活躍する企業等におけるSDGsの実現に向けた取り組みの紹介、地元

Uターン就職者等へのインタビュ動画の作成、地域の優れた伝統や文化、新たな魅力の発信などを行うこととしています。

**(3) 成果発表及び成果普及**

**① 課題解決コンテスト「ソーシャルチャレンジグランプリ」の開催**

全ての県立高校等を対象に、課題解決に向けた研究活動の成果に関するコンテストを、愛媛県教育委員会が開催し、最優秀校等を選出します。

**② 成果発表会「えひめスーパーハイスクールコンソーシアム」での発表**

本事業における活動内容に加え、県立高校等における先進的な教育活動の報告、意見交換等も含めた発表を行います。また、本コンソーシアムを、中学生や保護者、地域、教育関係者に公開して、各校の特色ある取り組みを紹介し、県立高校等で学ぶ魅力を伝えることとしています。

**実施に向けて**

愛媛県教育委員会においては、今後とも、各校で実施される課題解決型学習や体験型学習等を通して、子供たちの成長を促すとともに、地域の発展に貢献できる創造性豊かな人材が育成されるよう、学校教育の充実に努めてまいります。

# 特集5

## 地域に根差した団体へ

### Museの活動について

こんにちは！松山大学地域創造研究所 Muse（以下Muse）の代表をしており、松山大学人文学部社会学科三回生の西村和真と申します。Museでは、愛媛県各地での地域支援ボランティアや社会連携活動を行っています。主な活動例としては、とべの里冒険クラブボランティアリーダー養成事業、番町・八坂事業、菊間駅市事業、障がい児創作体験事業、砥部村の駅五本松事業、マイロード清掃事業など、地域に根ざした活動を行っています。

固定事業だけでなく、自治体や企業等から依頼のある社会連携活動など、様々な活動に参加しました。また、Museメンバー同士の交流を目的として、今年度は8月に海で花火大会、10月にはB・B・Q大会、12月にはクリスマスパーティーを行いました。

### 学生と地域の協働事例

#### ●とべの里冒険クラブボランティアリーダー事業

砥部町との企画で、学生が子どもたちと一緒に砥部町の文化や自然と触れ合いながらキャンプなどの野外活動を楽しむ事業です。今年度の活動としては、砥部

焼の絵付け体験、ピザづくり、砥部町オリジナルエンターリングやスタン

プラリーなどを開催しました。子どもたちと一緒に何かを協力して成し遂げると

いうことが、子どもたちの成功体験になりますし、逆に私たちが子どもたちから刺激をもらうこともありません。

子どもたちの成功体験になりますし、逆に私たちが子どもたちから刺激をもらうこともありません。

#### ●番町・八坂事業

番町公民館・八坂小学校の方々と協力し、番町公民館の1階を貸し切り、10月31日にハロウィンパーティーを開催し、お化け屋敷や迷路などを製作して子どもたちに楽しんでもらったり、製作した



とべの里冒険クラブ「ピザ作り体験」



とべの里冒険クラブ「キャンプ」

松山大学地域創造研究所 Muse 代表 西村 和真



フォトスポットでご家族の写真撮影を手伝ったりしました。年に一度のハロウィンイベントを地域の方々と一緒に楽しみながら盛り上げていけることにやりがいを感じています。

#### ●菊間駅市事業

毎年7月に今治市の菊間駅で行われる花火大会がある夏祭り、射的や輪投げ、工作ブースやミニスポーツブースなどの出店の運営スタッフとして活動しています。また、10月にはハロウィンイベントのお手伝いもしています。

活動自体は忙しく大変ですが、ご来場される方々の笑顔を見ると、私たちも幸せと一緒に感じることが出来ます。



菊間駅花火大会出店

#### ●障がい児創作体験事業

愛媛県中予地方局主催の事業で、「障がいのある子どもたちの生きがいを創造

している」というテーマのもと、子どもたちが砥部焼創作体験を行い、そこで作られた作品を松山市各地の施設に展示するという事業です。私たちはその創作体験の様子や福祉施設職員へのインタビューの様子などを撮影し、編集して動画を制作しました。

また、松山大学樋又キャンパスにあるアカデミック・ソーシャル・コモンズで作品を展示した際には、創作体験に参加した児童・生徒、施設職員、保護者などへの見学会を開催し、子どもたちが創作した砥部焼40作品の見学と私たちが制作した動画を鑑賞しました。子どもたちが砥部焼を創作し、完成した作品を見に来た時に、自分の作品を見てとても喜んでる姿を見ると、私自身もこ



障がい児砥部焼創作体験展示会



障がい児砥部焼創作体験取材

の企画に参加して良かったと感じました。子どもたちにとって、とても楽しい思い出になったようです。

### Museの今後の地域との関わり方

私たちMuseは、2年前はメンバーが30人程度でしたが、公式Instagramの開設や大学内でのピラ配り、サークルオリエンテーションでの発表などが効果的だったのか、この2年間でメンバーが160人に増加し、団体の規模がとて大きくなりました。今後は、地域の方々との活動を継続しながら、新しい事業を始めていきたいと考えています。大学生と一緒に地域を盛り上げていきたいと考えている自治体や企業の方々ともっと協力して、地域活性化を進めていきたいです。Museへの依頼等ありましたら、是非とも松山大学社会連携課へご連絡ください。

### Museの組織の在り方・展望について

今までのMuseは、愛媛県や松山市、砥部町などからの依頼や、愛媛県内の企業からの依頼を受けて活動していくのが主流でした。これからのMuseは、それらの活動に加え、自分たちで企画を考案し活動していきます。

コロナ禍の時期に依頼が減り、存続の危機に陥ったMuseでしたが、最近では多くの事業が再開され、元通りの活動ができるようになりました。これから先、安定的に活動

を続けられる学生団体にするために、私も尽力していきます。そして、「松山大学のMuse」としてではなく、「愛媛県の地域に密着した活動をしているMuse」としての知名度を獲得していきたいと考えています。松山大学で1番規模の大きい学生団体を目指しながら、いつかは愛媛県で1番、さらには四国で1番の知名度・影響力を持った、地域を活性化していく学生団体となるのが私の夢です。



FM 愛媛ラジオ収録



## “おだこう”がある未来を守る

内子町地域おこし協力隊／愛媛県立内子高等学校小田分校教育魅力化コーディネーター

小田原 希実



### 内子町に来た理由

愛媛県のちようど真ん中辺りに位置し、周りを山に囲まれた人口約一万五千人の町・内子町。7つの小学校、4つの中学校、そして2つの高校が内子町にはありま



創立74年を迎える内子高校小田分校。シンボルマークの「ダイスギ」が生徒たちの成長を見守ります。

す。この町に、2020年4月から地域おこし協力隊として着任した私が任せられたミッションは、「内子高校小田分校の魅力化」。着任した当時の小田分校は、最短2年で募集停止になるおそれがありました。

東京都で生まれ育ち、教育学部に進学した私が、あるきっかけで就職先について考え直したときに出会ったのが、「教育に携わる地域おこし協力隊」という選択肢でした。地方で3年という限られた期間、教育現場に携われるというのが当時の私にとっては非常に魅力的な仕事に見えました。全国各地で教育に関する協力隊の募集が行われていました。そのなかでも愛媛県は気候が温暖なイメージがあり、過ごしやすそうだったので、複数の自治体に話を聞きました。どの自治体も魅力的でしたが、内子町の方たちは特に高校魅力化に対する熱量が高く、この人たちと一緒にチャレンジしてみたいと思えたので、内子町で協力隊になることに決めました。

### 教育魅力化コーディネーターとしての活動

大学を卒業してすぐの2020年4月に内子町地域おこし協力隊に着任し、愛媛県立内子高等学校小田分校 教育魅力

化コーディネーターという役割に就きました。着任当初は、愛媛県内の県立高校に教育魅力化コーディネーターという役割がある学校が存在せず、県立高校に町の職員が入って活動するというのは県内では初めての取り組みでした。

また、その年の新入生の数が少なかったことから、それまでの小田高校が内子高校の分校となり、あと2年以内に31名以上の新入生が集まらなければ小田分校の募集停止が決まるという、大変切羽詰まった状況に追い込まれていました。そのため、元々のコーディネーターの仕事である、総合的な探究の時間の授業づくりに加えて、生徒募集活動も重要なミッションの一つとなりました。

活動開始の時期がちようど新型コロナウイルス



オンラインを駆使して授業を受ける生徒たち





入感染症の流行と重なり、外部講師を招待しての授業や広報活動もオンラインが主となりました。未曾有の事態で様々な工夫が必要でしたが、オンラインだからこそ、全国から講師をお招きできたり、全国の中学生に小田分校の魅力を伝えることができたりと、良いことも多々ありました。コーディネートターとして私がアレンジした授業に影響を受けて進路を決めた生徒や、主催した説明会やオープンスクールでの話を聞いて小田分校への進学を決めた中学生を見ると、とても嬉しい反面、コーディネートターという立場の責任を強く感じます。

## 地域のみなさんとともに

2022年の春、小田分校に39名の生徒が入学しました。31名以上の新入生を迎えることができたため、悲願の小田分校存続が決定しました。これは決して私一人の力ではなく、むしろ学校・行政も含め、地域の皆さんの尽力のおかげです。

現在、小田分校に通う生徒の約半分は寮生活を送っ



隔週土曜日のお食事会の様子。いつも栄養満点・お腹いっぱいのお食事を提供していただいています。



手作りの100円募金箱。名簿にはたくさんのご芳名が。

ています。高校生が親元を離れて住むには正直不便な土地ですが、それでも高校生活を送ることができているのは「小田寮生サポーター」という、有志のボランティアが買物や通院の支援をしてくださっているためです。また、寮の食事が土日は出ないことを知った方が、寮生の自炊の負担を減らしたいと、隔週土曜日にお食事を無償で提供してくださるようになりました。そして、ご近所の飲食店から「100円募金」という高校生のための募金が始まり、こちらも無償で高校生たちに季節の郷土料理を振る舞ったり、餅つきなどのイベントを開催したりしてくださっています。このような温かな地域だからこそ、安心して子どもを送り出せる、全国から入学生が集まってくるようになったのです。

## ♪おだこうがある未来を守る

地域の方々がなぜここまで小田分校のためにしてくださるのか、最初は不思議でた

まりませんでした。しかし、皆さんに尋ねてみると、口々にこうおっしゃいます。「小田分校がここに残ってくれることが何より嬉しい」「高校生が町にいて、若い声が聞こえてくるのが嬉しい」「だから、小田分校が存続するためにできることは何でもしたい」

高齢化率が高く、過疎化が進む小田地区。子どもの数は年々減り、中学生は一学年一桁。そんなこの地域に全国から高校生が集まり、賑やかな声を響かせています。地域とともにある小田分校は、地域の皆さんがいなければ存続できませんでした。その一方で、若さ・賑わい・明るさを町にもたらす高校生という存在が、地域の方々にとってはかけがえのないものとなっています。

地域に愛されてきた「おだこう」は、決して高校生の学びの場というだけではなく、地域の明るい未来の象徴でもあります。これからもこの小田地区に、賑やかで活気のある明るい未来があるように、「おだこう」を守り続けていかなければなりません。



## えひめ暮らしネットワークの 活動について

わたしたちは、『愛媛に暮らす人』『愛媛に移住した人』『愛媛に移住したい人』たちをつなぎ支援し、より元気な地域が増えていくことを目指すネットワーク組織です。

県内各地で暮らす元地域おこし協力隊が担当する移住相談窓口などを通して、愛媛県への移住推進、地域おこし協力隊や移住者のフォロー、生業づくりや地域の活性化など、愛媛で自分らしく暮らし働く人たちのバックアップに取り組んでいます。

昨年度の活動と今年度の展望について、昨年度下期に実施した事業を中心にご報告いたします。

### 「活動プランニング研修会」「ローカルビジネス創出研修会」の開催

昨年秋から冬にかけて、地域おこし協力隊を対象に、それぞれ全3回のプログラムで二つの研修を実施しました。

まず、「活動プランニング研修会」では、地域との関係構築のプロセス・課題抽出の方法・プラン作成のポイントなどを現役隊員や卒業生との交流を通じて学び、活動プランの

ブラッシュアップや、活動中に発生する課題に対して臨機応変に対応するスキルの向上を目指しました。5市町から9名の参加があり、それぞれ今後の活動が楽しみになるプランを作成しました。

続いて、

「ローカルビジネス創出研修会」では、活動中や任期後に起業を目指す隊員を対象に、実例をふまえた知識や具体的なスキル、習得を目指しました。参加した10市町のべ21名の隊員は、実際に起業した協力隊OBの講演のほか、起業時の事業形



起業に必要なことを学ぶローカルビジネス創出研修会



自分自身とも人も向き合う活動プランニング研修会



一般社団法人  
えひめ暮らしネットワーク  
事務局長 千々木 涼子

態や支援制度などについて学びました。今年度は、より研修のブラッシュアップを行い、県内で活動する地域おこし協力隊の方々の活動や任期後のサポートに努めてまいります。

### 地域おこし協力隊活動紹介ブログについて

一昨年度に引き続き、県内で活動する地域おこし協力隊やその活動をブログ形式で紹介しました。えひめ暮らしネットワークのホームページに加え、より多くの方に見ていただくため、愛媛県移住ポータルサイト「えひめ移住ネット」にも掲載しました。

地域おこし協力隊員の思いやその活動を知っていただくことで、隊員の活動を応援してくださる方や、活動地域に関心を持つ方が増えるのではないかと考えています。

昨年度着任したばかりの隊員には、えひめ暮らしネットワークのメンバーが取材を行いました。愛媛県に移住して6年以上が経つメンバーでも、地域を訪れ、新しく着任した隊員と話すことで、初めて見えてくる地域の魅力に驚きます。

## インタビュー



四国中央市前・地元出身の地域おこし協力隊



生きるを喜び暮らしを求めて



サイクリングを内子町の新しい風潮に



田舎で可能性を広げてます



過労は首都圏から移りかかぬ内子町のミカンの農へ



林業家を目指してまっすぐに

隊員執筆記事 10 本と取材記事 5 本を公開!

## 「えひめ暮らしネットワーク異業種交流会」の開催

愛媛県で暮らす方や移住を検討されている方にとっても、隊員の視点を通して新たな地域の魅力に出会える記事となっており、ぜひご覧いただければ幸いです。

県内で活動する現役の地域おこし協力隊、県内で活動していた地域おこし協力隊卒業生、えひめ暮らしネットワークの一般会員、コワーキング会員の方を対象に、交流会を開催しました。えひめ暮らしネットワークの運営メンバーを含め20名以上の参加が

あり、初めて会う人、会ったことのあるけれど初めて話す人などが交流し、新たな出会いやつながりが生まれましました。

今年度もこういった交流の場作りを積極的にを行い、新たなつながりづくりのサポートをしています。

## 今年度の事業展開について

新型コロナウイルスの感染拡大は落ち着きを見せつつありますが、コロナ禍をきっかけに高まった地方移住を検討する気運はゆるやかに続いていくのではないかと思います。

当法人では、南予子育て暮らしアドバイザー・メイト移住体験ツアーをはじめ、お試し仕事&移住プログラム「えひめde仕事体験!」やオンラインや対面での相談会などを通じて、移住を検討される方がより具体的に移住後の暮らしをイメージし、移住を実現するためのサポートをしております。

今年度も引き続き、新しく「愛媛に移住したい人」の支援を行うとともに、すでに「愛媛に暮らす人」、地域おこし協力隊



新たなつながりやきっかけが生まれる場づくり

をはじめ「愛媛に移住した人」をつなぎ、サポートしていきけるよう努めてまいります。今後ともご支援いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

## 会員募集中

一般社団法人えひめ暮らしネットワークでは、会員を募集しています。ぜひご登録ください。

また、当法人が運営するコワーキングスペース『COWORKING-HUB nanyo sign (南予サイン)』では、コワーキング会員の募集をしています。

南予サインは、愛媛県南予地域の玄関口である内子町に構える、移住相談窓口を併設したコワーキングスペースです。みなさんにとっての大切な「ヒト・コト・モノ」に出会えるハブとなるよう、プロジェクトが生まれ、コミュニティに加わることで、心地よい場所づくりを目指しています。こちらもお気軽にお問い合わせください。

COWORKING-HUB nanyo sign について



会員登録はこちらからどうぞ!





人間牧場主・年輪塾々長  
若松 進一

## 子どもや学生も地域を 変える新しい戦力である

私たちは通常小学生を児童、中学生や高校生を生徒、大学生を学生と呼んで区別していますが、最近は成人年齢の18歳への引き下げもあつて、その領域区別がつきにくいところがあるようです。高校も大学もない私たちの地域では、中学校を卒業すると域外の学校に通う子どもが殆どで、中には親元を離れて暮らす学生生徒もいて、高校の生徒や大学の学生を地域づくりに関わらせたいと思つてみても、余程のことがない限り残念ながらできない状態にあるのです。

それでもわが町では子どもたちに自分の生まれ育つたふるさとに愛着を持たせようと、ふるさと教育の一環として20年も前から子ども教室を地道に続けて開催しています。十数年前からふるさと体験塾や通学合宿を卒業した希望者を募り、双海町ジュニアリーダー会をつくり、子ども教室の運

営スタッフとして働いたり、時にはジュニアリーダー会独自のイベントを開催して楽しんでいきます。

今年度はそうした活動をさらに進化させ、地域活性化の担い手となる活動をしようと目論み、ベンチを作つて海岸国道378号16kmの1kmごとに、ベンチを設置する壮大な、大人顔負けのプロジェクト事業を立ち上げ、早速準備に取り掛かりました。プロジェクト事業には①企画書づくりと現地踏査②場所の選定と許認可③費用の獲得④大人支援グループの立ち上げ⑤ベンチの夢コンテスト⑥設置場所の草刈り整地⑦ベンチ製作作業⑧ベンチ設置作業⑨今後の設置スケジュールなど幾つもの手順が考えられますが、部活や入試でそれだけでなく忙しい中・高校生の能力と作業には限界があり、中々思い通りには行きませませんでした。

①ジュニアリーダー会で事業化が決まると、実行委員会代表の私と公民館主事の二人でまず現地踏査をして、大まか1kmごとの想定した予定地を下見し企画書原案を作りました。②予定地を航空写真地図上に落とし、それぞれの写真を添付し、事業の見える化をしました。その計画書を国道を管理している土木事務所へ先に送つて後日

出向き、民地や公共用地、J・R四国の土地などに区分して、それぞれの了解や許可内諾を得ました。③一番の大仕事は費用の捻出です。幸いえひめ地域活力創造センターの「まちづくり活動アシスト事業」に応募したところ採択されて15万円の費用が確定しました。④このプロジェクトは製作などになり専門的な知識、それに労力支援が欠かせず、特に製作にかかわる大工さんも加わつた大人の支援グループが必要なため、理解をいただいて立ち上げました。⑤さて15万円の範囲内での程度のベンチの製作と設置が可能か協議したところ、今年度はとりあえず高野川・シーサイド公園・J・R下灘駅下・市境満野の4か所に設置することが決まりました。ベンチの形状にできるだけジュニアリーダーのアイデアを取り入れるため、「ベンチの夢コンテスト」を思いつきました。場所を想定した面白いアイデアが沢山集まり、全員参加の手挙げ方式審査によつてベンチ製作の夢は大きく膨らみ、設置場所の個性を生かしたデザインが決まりました。⑥今回のプロジェクトの中心地はすっかり有名になっているJ・R下灘駅下の旧波返し広場で、今では無人駅ながら観光列車「伊予灘ものがたり」も停車する目立つ場所だけに、雑草生い茂る広場や斜面の草

刈り整地で、合計5回もの作業はかなり苦勞をしましたが、どうか設置までに間に合いました。⑦同時進行で支援グループ主力メンバーの大工さんに粗方組み立て作業をやってもらい、メンバーは木の皮を剥いたり、くぎを打ったり、ペンキを塗るなど寒い冬の季節風に耐えながら何とか4回の作業で4基のベンチを完成させました。⑧さあ待ちに待ったベンチの設置作業です。企画から設置まで8か月を要したプロジェクトの最終章はそれぞれ4か所の予定地にベンチを設置し、JR下灘駅下のメイン会場でささやかな式典を行いました。このプロジェクトの主役はジュニアリーダー全員なので、普通ありきたりな代表によるテープカットではなく、全員が白い手袋をはめ、全員が自ら持参したハサミでテープカットするという、世にも珍しいアイデアで喜喜満面でした。4か所それぞれのベンチにはそれぞれ物語が生まれ、訪れた人たちが、双海ブルーの広がる海や双海のシンボルである夕日夕焼けを見ながら、双海の休日をおんびりと過ごして欲しいと願っています。

さてこのプロジェクト事業は、今年度で終わりではなく、1年4個の製作設置だとしても後3年にかかる計画です。⑨今年は幸い資金の目途はつきましたが、今後の見込みは立っていません。また中心的に働いたリーダーたちも次の目標に向かって歩を進めるため、未知数の部分も多くあります。でも支援する大人グループの団結はゆるぎなく、多分夢の実現に向けて協力してくれるに違いありません。

先日子どもたちみんなと作業をしながら話していると面白い意見が飛び交いました。

- ① 残りの必要な資金確保はクラウドファンディングで集めたらどうか。
- ② 鉄道と国道が並行して走っているので1番の設置場所（JR高野川駅）〜16番設置場所（JR喜多灘駅）を片道鉄道、片道歩いて周遊してもらおうウォーキング大会を開いたらどうか。
- ③ 1番〜16番までを歩くスタンプラリーを開いたらどうか。
- ④ それぞれのベンチの写真コンテストを開いたらどうか。
- ⑤ SNSでこうした情報発信をいっぱいしたい。

私たちはこれまで、地域づくりはある意味大人の専有物だと思っていました。ところがどうでしょう。

つい最近、高校再編の動きもあつて県内の高校も学校の生き残りをかけて様々な

地域づくりにチャレンジするようになり、地元新聞には毎日のように高校生の活動の話が枚挙にいとまがないほど載るようになりました。最近、地域活動をしている元氣な高齢者によく出会いますが、その人たちのほとんどは若い頃、青年団活動などをした経験のある人たちなのです。つまり少年期から青年期に地域活動を経験させると、100歳まで生きるであろう長い自分の人生を、地域とともに生きることができのです。私は若い頃青年団で①仲間②主張③ふるさと④感動⑤夢⑥学ぶ心という6つの道具を手に入れたお陰で、豊かな人生を送っています。

「子どもや学生は地域を変える新しい戦力である」。地域の活力づくりの新しい私たちです。

「これまでの 地域づくりは 私たち大人だけだと 思っていたが」  
「子どもでも その気になれば 知恵と汗 大人顔負け 中々やるわい」  
「若い頃 六つの道具 手に入れた お陰で人生 悔いなく過ごす」  
「子ども力 生かせば 汗も知恵も出る 爺さんの俺 負けてはおれぬ」  
(若松進一の笑売啖阿)

## 浦中要次郎とその家の物語り (八幡浜市)

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
近代化遺産活用アドバイザー

八幡浜市には、矢野町と新町という逆T字型のアーケード街があり、その新町筋の北に位置してこの由緒ある建物がある。と言っても知る人は少ないが、上田表具店の場所だと言えれば見当がつくかもしれない。かつてこの二階には120畳の座敷があったと言われる建物である。

筆者は、もう随分前にこの堂々たる建物がかつての浦中家だと教わって以降、気になっていた。八幡浜で浦中という名は、格別思い入れがある(そうであつて欲しい)名



旧浦中要次郎家(現上田表具店)

である。そのことは後に述べるが、この建物に住んでおられる上田氏より「こ

んなのがあるが見てみるかい？」と教えてもらったのが、写真の棟札だった。そこには貴重な情報が刻まれていたので記録させて頂いた。

棟札とは、建築の際に上棟式(構造材の組み上げが一段落する時のいわゆる棟上げ)という儀式において、棟木束に置く(結ぶ)施工記録の板書きのことである。(現代住宅ではもうやらなくなつてくるかもしれない)これは、私どもが民家調査をする際には、是非とも確認をしておきたい言わねばその建物の由緒が分かるタイムカプセルのようなもの。

前置きが長くなつた。そこには以下のようなことが記されていた。まず、建物の名は「永楽館」、建築年が明治四十四(1911)年三月十日、二代目浦中要次郎とあり、町見村字嘉周(現伊方町加周)



貴重な棟札。「永楽館」と「二代目 浦中要次郎」の文字

出身で、父の小林吉太郎と母から、一家の次男として天保四(1833)年三月十日生まれ、しかも彼が79才の時に建てたと明記されている。要次郎についての記録はあまり残っていないが、村田吉右衛門により昭和15年に編まれた「西豫人物誌第一編」から抜粋すれば、「製蠟業・金物及び度量衡販売を業とし、製蠟功労者として縁綬章を賜る。また八幡浜商業銀行頭取、帝国木蠟大会商議員として貢献す。」とあるから、八幡浜市における有力な経済人であつたこと



昭和10年頃の空撮写真(坂本齒科蔵)

が伺われる。続いての記載に「大正元年十一月三十日死す、年八十」ともあり、何とこの永楽館を建てた翌年に没していることになる。

記述の木蠟業であるが、ここに貴重な資料があるので紹介したい。先ごろ保存活動をしている坂本歯科医院から見つかった古写真だが、そこに実に貴重なシーンが偶然写り込んでいる。この写真は、八幡浜町が

市制施行する昭和10年に大阪毎日新聞社機により空撮されたものと目され、それを部分拡大した写真がこれである。左中ほどに浦中家があり、その右側に何やら白い部分

分が段状に連なる。実はこの

部分は、現在の海望園という住宅地に当たり、昭和初期に造成されたエリアである。その造成地に今も建つ記念碑によれば、昭和二年二月に起工し同年七月に



海望園記念碑



現在の海望園

竣工と刻まれている。時期にズレがあるが、土地造成の場合、地盤を安定させるためにしばらく寝かせることも考えられ、数年は分譲販売されずに造成のままだったのかもしれない。問題はこの白く見えているものが何かということ。これは、木蠟業をやっていた浦中家が晒蠟の干場として使用していたと考えるのが妥当だと思われる。

現在では、木蠟と言えは内子が直ぐにイメージされるが、かつては喜多郡(大洲藩)・西宇和郡(宇和島藩)ともに盛んに生産されてお

り、特に八西地区では原料となる蠟の木栽培が盛んだった。奇しくも天保十年

(要次郎6才の時)に宮内村の平家利太治が発見した利太治蠟は収量多く、後にこのエリアが主要生産地となってゆく契機となった。(明治18年の生蠟生産では西宇和郡がダントツ・県誌参照)中でも浦中家は内子の芳我家と並びこの業界における有望家であった。要次郎没後も木蠟業をやっていたようである。これは、そのことを物語る貴重な証明写真でもある。

さて、そんな浦中家では明治20年、要次郎が54才の時に市内菊池家から養子を迎える。それが友治郎(当時15才)である。彼は八幡浜銀行専務の後鉦山業に進み、県議出馬の後には大正15年から9年間八幡浜

町長として様々に実効を上げ、市制(昭和10年)実現に向けて尽力

した。それらの功績により、愛宕山に顕彰碑が建てられている。冒頭の肩入れをした書き方は、そうした今の八幡浜の基礎を作った家でもあるからだ。

さて、少し棟札のことに話を戻すが、裏書にはこの建物を実際に建てた7名の棟梁たちの職人名が書かれている。リーダーは三崎村、四ツ濱村など半島大工、あるいは三崎(岬)大工と呼ばれる人たちである。杜氏文化がそうであるように、物成りの悪い地域では、腕に技術をつけて生活手段として他所で稼ぐという職人文化が花開く。あまり

知られていないが、宇和盆地の旧家や八幡浜市内の主要な木造建築はそうした人々に支えられてきた。建物を維持され、こうして棟札を大切に保管されている上田氏にも

感謝するばかりでありである。



棟札(裏)職人名



浦中友治郎翁頌功碑

# 全国初!? 地方公共団体のための ワーケーションプログラム実施に向けて

一般財団法人地域活性化センター企画・人材育成グループ

副参事

能登村井塚本  
川上上上  
亜和美 悠太  
美也奈

えひめ地域活力創造センターは、「一般財団法人地域活性化センター」と相互の人材交流などを通じた地域の活力創造や地域づくりの中核人材の育成を図ることを目的に、令和4年4月13日、連携協定を結びました。今回はその活動の一端である「ワーケーション事業」をご紹介します。

## はじめに

一般財団法人地域活性化センター（以下「センター」という。）は、活力あふれ個性豊かな地域社会を実現するため、ひとづくり、まちづくりなどの地域社会活性化のための諸活動を支援し、地域振興の推進に寄与することを目的として、昭和60年10月に全国の地方公共団体と多くの民間企業が会員となって設立された財団法人で、平成25年4月に一般財団法人へ移行しました。

都道府県、市区町村、民間企業など、計1927団体が会員となっています。（令和4年9月1日現在）

当センターでは、情報誌「地域づくり」による最新の地域づくりの情報提供、地域の抱える様々な課題を取り上げた調査研究、日本各地のユニークなイベントを表彰する「ふるさとイベント大賞」の実施、地域イベントなどを通じた地域づくりに対する助成など、地域の活性化に資する各種事業を実施しています。

その中で、当センターでは今後、テレワーク施設等を活用した「全国の地方公共団体のための地方の学びの場づくり」の事業を展開しようとしており、その一つの手法として令和4年度から新規でワーケーション事業を推進することになりました。

## 第1回・6月ワーケーションを体験して

地方創生に向けた更なる人材育成を進めるため、地方創生の最前線である地域において、まずはセンター職員がワー



ハイブリットによる最終報告会（第1回）

ケーション（テレワーク）やワールドワークを実施し、地域課題を実践的に学ぶとともに、地域住民との交流を行うこととしました。

第1回として、

令和4年6月中旬から3週間、センター職員2名が愛媛県内子町を中心としたワーケーションを実施しました。コワーキングスペースでの勤務や視察（町役場、交流施設）、移住者などの地域住民との交流を通して、机上では知り得なかった地域課題に関する学びや経験につなげることができました。

第1回が有効であったため、来年度から全国の地方公共団体職員等を対象として実施することとなりました。それに向けてモニタリング研修を第2回として検討することとなり、その際に伊予市と公



地域住民によるイベント「菜月自然農園の朝ピクニック」への参加（第1回）



南予サインでのテレワーク（第1回）



# センター事例紹介

益財団法人えひめ地域活力創造センターにご協力いただくことになりました。一両者とも第1回の運営にご協力いただいていたとともに、令和4年4月に当センターと地方創生等に向けた人材育成に関する連携協定を締結しています。そのことから、連携事業の一つとして、第2回のワーケーションプログラムを3者共同で実施することになりました。

## 第2回・12月ワーケーションを体験して

第2回は、令和4年12月に2週間、新たにセンター職員2名と参加を希望した地方公共団体職員3名の合計5名で、愛媛県伊予市を中心として実施しました。また、第1回を体験したセンター職員2名は、前回の経験を生かし事業の運営を行いました。

プログラムは、ワーケーションの専門家による講義や、地域で精力的に活動されている方の話を伺うほか、自分の持つてきた仕事ができる自由時間などの内容としました。

地域住民や参加者同士の交流時間



移住者が開業した「酵素まる」にて米ぬか酵素風呂体験（第2回）



ワーケーション専門家による講義（第2回）

を多くしたこと、参加者からは「ワーケーションに関する知識を得たほか、地域住民との交流や地域の視察を通して自身の考え方を見直す良い機会になった」というような好評をいただきました。

また、今回ワーケーションを体験したセンター職員4名は「ワーケーションにおける地方公共団体の役割を改めて考えるきっかけとして、全国の地方公共団体職員等にワーケーションを経験してほしい」との共通認識を持ち、令和5年度のワーケーションプログラムを企画しています。

## 令和5年度開催予定のワーケーションプログラムについて

今年度のワーケーションで体験したことを生かし、令和5年7月（予定）には全国の地方公共団体職員等を対象にワーケーションに関する研修の開催を考えています。

ワーケーションを実際に体験し、生活圏外の地域で働くことで多文化理解を深めること、また、既にワーケーションを事業化している地方公共団体はそのブラッシュアップのため、これから検討する地方公共団体は効果的な事業考案・立案



ミューゼ瀬屋にて地域住民との交流（第2回）

案をするための機会とすることを目的としたプログラムとする予定です。さらに、地域住民や全国から集まる受講者との交流を通して、異なる価値観やノウハウに触れることで互いの創造性が高まる効果も期待できます。

## 終わりに

ワーケーションとは、ただ自分の生活圏を出てテレワークをすることではありません。自分の知らない土地で数日から数週間暮らし、その地域の文化や人に触れ、互いに交流することで、これまで自分の中になかった新しい価値観やノウハウを見つけるための「価値創造活動」だということを、ワーケーション体験を通して学びました。

地方公共団体の役割とは、テレワークができる施設やインターネット環境などのハード面の整備だけではなく、地域にある文化や地域と関わりをもつて活動していきたい住民の掘り起こしと、それら資源とゲストを結び付けることだと考えます。

来年度開催時は、ぜひ地方公共団体職員やワーケーション事業に関心のある皆様のご参加をお待ちしております。

# えひめ地域づくりアワード・ユース2022

次の世代の地域づくりを担う若い世代

の活動を支援し、地域活性化につなげることを目的に、高校生等の地域づくりに関する活動を表彰する『えひめ地域づくりアワード・ユース2022』を当センターとえひめ地域づくり研究会議との共催で開催しました。



大塚岩男センター理事長

第6回目となる今回の応募数は13校21作品（総勢333人）でした。11月中旬に書類による一次審査を行い、令和4年12月17日、愛媛県男女共同参画センター1階多目的ホールにおいて、上位5団体を対象とした最終審査及び表彰式を実施しました。どの取り組みも熱意にあふれ、地域への愛着と誇りを感じる作品の数々でした。審査の結果は次の通りです。

## 最優秀賞

・愛媛県立大洲農業高等学校「果樹班」

## 優秀賞

- ・愛媛県立西条高等学校「輝安KOU房」
- ・愛媛県立伊予農業高等学校
- 「伊予農業高等学校 生活科学科食物班」

## 審査員特別賞

- ・愛媛県立南宇和高等学校「地域振興研究部」
- ・愛媛県立新居浜商業高等学校「新居浜商業高校」

## 特別賞

- ・愛媛県立西条農業高等学校「種プロジェクトチーム」
- ・愛媛県立丹原高等学校「tanomoproジェクトチーム」
- ・愛媛県立伊予高等学校「グローバルに地域探訪〜国際交流を通じて地域の魅力発信〜」
- ・愛媛県立宇和島東高等学校津島分校
- ・愛媛県立宇和島東高等学校津島分校3班
- 「インターアクト部」

（順不同）

当事業は、愛媛県、愛媛県教育委員会、愛媛新聞社、南海放送、テレビ愛媛、NHK松山放送局、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、愛媛CATV、FM愛媛（順不同）よりご後援をいただきました。併せて、高校生の地域づくり活動にご理解・ご賛同いただき、15の企業・団体の皆さまより、副賞として商品等をご提供いただきました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

以下、最優秀賞・優秀賞を受賞された3校の活動をご紹介します。



活動発表の様子



副賞（企業協賛品等）



優秀賞  
伊予農業高等学校  
「生活科学科食物班」



優秀賞  
西条高等学校  
「輝安KOU房」



最優秀賞  
大洲農業高等学校  
「果樹班」

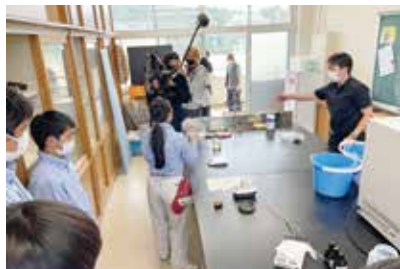
環境に配慮した果実袋の開発  
「バショウ」から始まるサステイナブルな農業

愛媛県立大洲農業高等学校  
「果樹班」

県内有数のブドウ産地を救いたい

愛媛大学福垣内准教授から「芭蕉和紙」を利用した農業用資材の開発を提案された。学校がある大洲市は県内有数のブドウ産地だが、高温による着色障害が頻発していた。その解決策を探ろう

と実施した農家見学で、青色光による着色の向上の可能性と果実袋の廃プラ処理の問題を知り、和紙を利用して土中に還元できる環境に配慮した果実袋の開発を目的に研究に取り組んだ。



芭蕉和紙の制作

青色光による着色不良の改善に着想を得て  
伝統産業の和紙との融合を図る

先行研究によると、青色光の葉や果実への照射は、アントシアニンや糖の蓄積が増加するということが判明した。そこで、青色に染色した「芭蕉和紙」を果実袋に带状に貼り付け、日中に太陽光を透過させ、青色光を照射

できないか考えた。社会福祉法人ピースの方々に「芭蕉和紙」の果実袋への貼り付け加工を依頼し、昨年4月に完成した。

さらに、土中に還元できるかを判断するために、開発した果実袋の成分分解性を埋没試験により実施した。セルロースナノファイバーを多く含むため、半年間で80%が土中に分解した。

昨年6月から地域のブドウ農家で試験栽培を実施。調査項目は、アントシアニンと糖度、果粒重とした。結果は、アントシアニンが27%、糖度が8%向上し、青色光の着色向上に有効であることが証明され、環境に配慮したサステイナブルな果実袋が完成した。



開発した果実袋とブドウ



販売実習

地域資源のバショウに新たな付加価値を  
有機質肥料としての可能性を秘める

研究の成果として、「芭蕉和紙」を活用したサステイナブルな果実袋が完成し、「芭蕉和紙」を利用した新たな産業の確立や雇用の拡大の可能性を示すことができた。また、青色光の着色改善効果が証明され、地域の農業の課題であった着色不良や廃プラスチックの問題を解決できる方向が見えた。

実際に、管内の農家で普及した場合、750kgのプラスチック削減につながると考えられ、今後は果実袋の商品化と普及活動を行いたい。

今後は、地域資源である「バショウ」の農業への活用を考え、肥料化を検討している。実際に「バショウ」の成分分析を行ったところ、カリウム成分が極めて高いことが判明している。また、肥料会社と連携し、乾燥させたバショウの堆肥化を行い、地域資源に付加価値を付けるとともに、農業高校として地域の農業を振興させたいと考えている。



肥効試験栽培

## 輝安KOU房活動中

「西条市にある、世界一を守れ!!」

愛媛県立西条高等学校

「輝安KOU房」

### 現状と活動のきっかけ

高品質の輝安鉱が産出されたことで世界的に有名な市之川鉱山は、昭和32年に閉山しました。その後は、地元住民の記憶から薄れ忘れられた存在となりました。そこで私たちは、市之川鉱山の歴史や輝安鉱の魅力进行研究し、「西条市にある、世界一」の輝安鉱の知名度を高めるための活動に取り組んでいます。

現在鉱山関係の貴重な資料は、市之川公民館内の資料室に展示されています。これまで度重なる自然災害等の影響で、鉱山跡の産業遺構が無残な姿となってきました。そこで、市之川鉱山の歴史や輝安鉱をPRする拠点を、市之川地区から市内に移設し、「市之川鉱山資料パーク」として整備することができれば、西条市の新たな魅力ある資産となり、地域ブランドディングに貢献できると考え、実践活動を開始しました。



輝安鉱

### 企画・実践

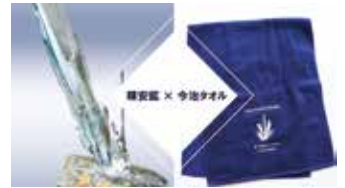
「市之川鉱山資料パーク」を整備するために、クラウドファンディング(CF)での資金調達に挑戦しました。集めた資金で、輝安鉱デザイン

入り今治タオルを生産し、このタオルを地元商店街や百貨店等で販売、市之川鉱山資料パーク開設のために出資する計画です。リターンには、輝安鉱入りストラップやボールペン、タオルなど、輝安鉱をPRする商品を準備し、開始から11日目で目標を達成しました。支援者からは、「このプロジェクトで、市之川鉱山の存在を初めて知った。西条の輝安鉱が、歴史の中に埋もれてしまうのはもったいない」などたくさんのお言葉をいただきました。

### 検証

CFの結果から、このプロジェクトは、多くの方々に認められたと分析します。総支援者数の81%が県内在住者です。その他、北海道から九州まで全国各地から支援をいただきました。CFを有効に活用したことで、新たなファンを獲得することもできました。プロモーションは、大成功したと考えています。

夏休みには、松山市の百貨店でワークショップ、研究発表、販売実習を実施し、商業科での学びを最大限に生かした活動ができました。



輝安鉱を使ったオリジナル商品の販売実習

### 課題

市内で、市之川鉱山資料パーク開設に向けてのアンケート調査を実施しました。72%が体験型やショッピングも楽しめる施設が良いと回答しています。調査結果をもとに、市之川鉱山資料パークを整備する場所として、市中心部に立地し、市民の憩いの場となっている「アクアホール」を提案します。また、四国初の「コミュニティ財団である「えひめ西条つながり基金」と連携し、持続可能で自立した資金繰りができる施設を目指します。

現在、『商業×科学』の新しいプロジェクトが進行しています。本校は、平成30年度から「スーパーサイエンスハイスクール事業(SSH)」に取り組んでいます。この研究の中で、人工輝安鉱の合成に成功しました。科学の力で、輝安鉱の新しい価値が生まれようとしています。私たちが新たなソーシャルビジネスモデルのアイデアを提案し、地域を盛り上げ「世界一のまちづくり」に貢献します。

### まとめ

輝安KOU房は、市之川鉱山の歴史や輝安鉱の魅力を発信し、今以上に市民の皆様が愛され、未永く記憶に残る産業遺構となるようこれからも活動を続けていきます。「西条市にある、世界一を守れ!!」



#いよはよい↓#えひめはよいプロジェクト  
↓#広めたいよ#地域食材&伝統工芸品↓

愛媛県立伊予農業高等学校  
「生活科学科食物班」

はじめに

伊予市で唯一の高校として「いよはよいプロジェクト」にチャレンジし、みかん・キウイ・びわ葉・栗・ちりめんじゃこ・椎茸・鰹節などの地域食材の活用のみならず、伊予緋・水引・和紙を使用し、「伝統文化の継承」にも努めています。そして、伊予市や愛媛県の魅力を伝えることを目標に研究を進めています。

#いよはよい「伊予市唯一の高校として！」

「ウェルピア伊予(愛媛県伊予市都市総合文化施設)の空き地の管理が大変。」という相談を受け、空き地にウェルピア農園を作っています。野菜を収穫後、バイキングメニューに使用しています。また、伊予市学校給食センター・愛媛県森林組合連合会と連携し、椎茸の消費



ウェルピア農園野菜  
使用メニュー



給食提供の様子

量を増やすために給食献立を考えています。

#えひめはよい「企業を助けていよ！」

道後のホテル「にぎたつ会館」から「コロナ禍で、観光客が減り、苦戦している。」と相談を受けました。「お弁当で困っている企業を助けていよ！」と考え、地域食材を使用した「お弁当」を販売しました。また、砥部町の「カフェ永遠」と連携し、若年層のお客を増やす戦略を立てました。

#広めたいよ「コンテストと伝統工芸品でPR」

毎年、愛媛県産原木乾しいたげ料理コンテストに応募し、入賞しています。2021年・2022年J Aカレンダーコンテンツに応募し、2年連続採用されました。コロナ禍でも愛媛の魅力を広めるために、伊予緋、水引、和紙を使ったカトラリーの製作をしています。

まとめと今後の課題

ウェルピア農園で収穫した野菜をランチバイキングに使用できました。私たちが考案した給食が1万9200食提供され、今年度もすでに6000食提供されています。

にぎたつ会館とのコラボ弁当は、3000食の販売となりました。カフェ永遠で私たちの考案したメニューが1日7食

以上提供されています

ホクト株式会社から、島根県のスーパーウシオで椎茸の販売促進のイベントがあり、愛媛県産原木乾しいたげ料理コンテストのレシピを提供してほしいと依頼を受けました。椎茸のレシピが広まりました。J Aカレンダーは、8万枚配布され、来年度も掲載が決定し、さらに4万枚配布されます。伝統工芸品も製作の依頼を受け、給食センター見学会で小学生に配布し、魅力を伝えました。

今後も企業を助けながら、愛媛の良さをPRしたいです！#えひめはよいを広めたいよ！



事業名	事業内容
市町振興助成事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1)市町の振興に伴うイベント等助成事業</li> <li>(2)情報セキュリティ監査助成事業</li> <li>(3)メンタルヘルス対策事業助成金</li> <li>(4)災害支援金</li> </ul>
市町職員等研修事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1)愛媛県研修所での研修事業</li> <li>(2)市町職員研修事業</li> <li>(3)市町村職員中央研修所(市町村アカデミー)及び全国市町村国際文化研修所(国際文化アカデミー)の受講に係る助成</li> <li>(4)関係団体研修事業等に係る助成</li> </ul>
情報提供事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1)愛媛縣市町要覧の発行</li> <li>(2)市町振興のための資料配付 「地方財政要覧」</li> <li>(3)地域づくり情報誌発行事業 「舞たうん」、「えひめイベントBOX」</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1)市町関係団体等への助成(愛媛県市長会・愛媛県町村会を經由) <ul style="list-style-type: none"> <li>①一般財団法人地域活性化センター年会費</li> <li>②日本貿易振興機構(ジェトロ)愛媛貿易センター運営負担金</li> <li>③松山空港利用促進協議会負担金</li> <li>④自転車新文化推進協会負担金</li> </ul> </li> <li>(2)愛媛大学の地域医療学講座への寄附</li> </ul>

### ◎令和5年度市町村振興宝くじ発売概要

	サマージャンボ宝くじ	ハロウィンジャンボ宝くじ
発売期間	7月4日(火)～8月4日(金)	9月20日(水)～10月20日(金)
発売計画額	930億円(前年度930億円)	510億円(前年度480億円)

～市町村振興宝くじの収益金等を活用し、愛媛県内20市町の振興に寄与～  
公益財団法人愛媛県市町振興協会

◎令和5年度事業のあらまし

当協会は、市町財政の厳しい環境に配慮し、的確な財政運営を実施していくとともに、市町の公共施設整備事業等への資金融資、市町振興事業に対する助成及び人材育成のための研修等、次に掲げる事業を行います。なお、市町村振興宝くじ販売促進事業については、関係団体の協力を得ながら行います。

事業名	事業内容																																	
資金貸付事業	<p>(1)長期貸付事業 貸付予定枠 20億円(愛媛県協会:20億円) 貸付対象事業 愛媛県知事と協議し同意又は許可を受け、あるいは届出をしている一般会計債の事業とする。</p> <p>貸付条件</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">償還期間 および利率</th> <th rowspan="2">償還期間</th> <th rowspan="2">据置期間</th> <th colspan="3">最近の貸付利率</th> </tr> <tr> <th>R4.5</th> <th>R4.3</th> <th>R3.5</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5年</td> <td>1年</td> <td></td> <td>0.10%</td> <td>0.10%</td> <td>0.10%</td> </tr> <tr> <td>10年</td> <td>2年</td> <td></td> <td>0.20%</td> <td>0.20%</td> <td>0.10%</td> </tr> <tr> <td>12年</td> <td>2年</td> <td></td> <td>0.30%</td> <td>0.21%</td> <td>0.11%</td> </tr> <tr> <td>15年</td> <td>3年</td> <td></td> <td>0.30%</td> <td>0.30%</td> <td>0.20%</td> </tr> </tbody> </table> <p><small>本協会基金等貸付細則附則第2条の規定の特例として、財政融資資金の貸付金利を基準とし、理事長が定める貸付利率とする。ただし、当分の間、貸付利率は、年0.1%以上とする。</small></p> <p>償還方法 半年賦元金均等償還 償還日 9月17日及び3月17日 貸付日 令和5年5月24日、令和6年3月25日</p>	償還期間 および利率	償還期間	据置期間	最近の貸付利率			R4.5	R4.3	R3.5	5年	1年		0.10%	0.10%	0.10%	10年	2年		0.20%	0.20%	0.10%	12年	2年		0.30%	0.21%	0.11%	15年	3年		0.30%	0.30%	0.20%
	償還期間 および利率				償還期間	据置期間	最近の貸付利率																											
R4.5		R4.3	R3.5																															
5年	1年		0.10%	0.10%	0.10%																													
10年	2年		0.20%	0.20%	0.10%																													
12年	2年		0.30%	0.21%	0.11%																													
15年	3年		0.30%	0.30%	0.20%																													
<p>(2)短期貸付事業 貸付対象事業 当該年度内に行う必要がある緊急的な公共事業や災害防止対策事業 貸付条件 貸付利率 本協会基金等貸付細則附則第2条の規定の特例として、財政融資資金の貸付金利を基準とし、理事長が定める貸付利率とする。 ただし、当分の間、貸付利率は、年0.1%以上とする。</p> <p>償還方法 一括償還証書貸付 貸付期間 単年度貸付(年度内償還)</p>																																		
交付金の交付事業	<p>(1)市町交付金 令和5年度新市町村振興宝くじ(ハロウィンジャンボ宝くじ)及びインターネット専用全国自治宝くじ「クイックワン(新市町村振興分)」の収益金を愛媛県が協会に交付する愛媛県交付金を財源として市町へ交付する。</p> <p>(2)基金交付金 サマージャンボ宝くじ収益金をもって愛媛県が協会に交付する愛媛県交付金を積み立てる基金積立金を財源として市町へ交付する。</p>																																	
	<p>交付金の対象事業は、地方財政法第32条に規定する事業で、交付を受けた市町は、市町が必要とする当該事業に充当する。</p>																																	

## 「えひめイベントBOX」ウェブサイト作成のお知らせ

(公財)えひめ地域活力創造センターでは、これまで愛媛県内で開催されるイベント情報を紙媒体でお届けしていましたが、来年度より、利便性の向上とより多くの方にご利用いただくため、新たにウェブサイトを作成しました。今後、当ウェブサイトにて随時情報を発信していきます。

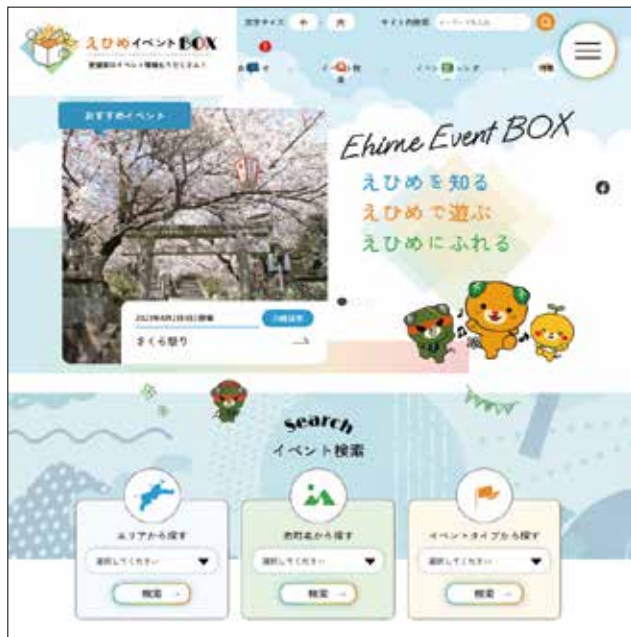
### ポイント

- 最新情報の常時提供
- スマートフォンなどの端末いつでも情報確認が可能
- 豊富な検索機能  
(エリアやイベントタイプ別、イベントカレンダー等)

### サイトURL

<https://e-eventbox.jp/>

えひめイベントBOXのウェブサイトはコチラからご覧いただけます!



## パブリックスペース「tilikiの部屋」のご紹介



当センターのパブリックスペース「tilikiの部屋」を利用することができます! 打ち合わせや意見交換、テレワーク等にご活用ください!

**利用料** 原則無料

- 利用できる方**
- 愛媛県内に住所を有する方または愛媛県内に通勤・通学している方
  - 愛媛県内に事業所や事務所を有する方または法人その他の団体
  - 国の機関及び地方公共団体に勤務する職員

詳しくはコチラをご覧ください。



### 【編集後記】

人口減少社会といわれるように、地域の担い手が減り、地域と学校の連携が難しくなる一方で、ご紹介したとおり学習指導要領の改訂や行政の介入により、社会教育の制度化が進んだり、学校とは離れたところでの動きもみられるようになりました。そういった現場で共通して感じることは、地域そのものが若者たちの教育の場であるかのように、地域の方々が当たり前に入力、協力を惜しまない体制ができていること。そんな地域に住む皆さまは、年齢も立場も関係なく『郷土愛』にあふれ、嬉々として地域の自慢をしてくださいます。そしてその『郷土愛』が親から子へ、子からまたその子へとつながっていく、そんな地域づくりに取り組む皆さまの一助となれば幸いです。

最後に日頃から当センター業務にご理解・ご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。フェイスブックで当センターの活動や関連団体の情報、愛媛のトピックスなどを毎日発信しておりますので、ぜひご覧下さい。ご協力いただきました皆様へ感謝の意を表します。来年度も変わらぬご愛顧のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(本田)

本誌へのご意見や地域づくり活動のトピックスなどがありましたら、お気軽に当センターまでお寄せください。

TEL 7901-0065

松山市宮西二丁目五番十九号

愛媛県商工会連合会館三階

(公財)えひめ地域活力創造センター

TEL 089(9)26(2)2000

FAX 089(9)26(2)2005

発行/令和5年3月

(公財)えひめ地域活力創造センター

印刷/平和印刷工業株式会社

(公財)愛媛県市町振興協会